
私の異世界転生録

りいさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の異世界転生録

【Nコード】

N8155X

【作者名】

りいさ

【あらすじ】

ごくごく一般的な女子高生だった私。ある日帰り道で見知らぬ男の人に刺し殺されてしまった。

それだけでも一大イベントだっていうのに、異世界転生！？しかも虎に！？

そんな女の子が異世界で闘ったり恋をしたりするお話です。

その一 とりあえず生まれましょう（前書き）

初投稿です。少しでも面白いと思っていただけたら幸いです。

その一 とりあえず生まれましょう

いつも通りの一日だった。

朝起きて、学校にいった、授業中に寝て先生に怒られて、友達に笑われて。

お昼を食べながら馬鹿なことを話して。放課後に本屋によって雑誌を立ち読みして。

そこまではいつも通りだった。あとは家に帰って一日が終わるはずだった。

私はいつも思うのだ。

あのとき、もう少し長く本屋で立ち読みをしていたら。

あのとき、いつもと違う道を通って帰っていたら。

どうなっていたのだろうと。

日が完全に落ちた住宅街を街灯の明かりだけが照らしていた。十月も後半に差し掛かりすっかり日が落ちるのが早くなり、気温も下がり始めていた。

「ちよつとさむいな・・・早く帰ろう。」

歩く速度を少し速める。

角を曲がったとき、街灯の下に人が一人立っていた。

まだ十月だというのに分厚いコートとマフラーをしている。

- - 随分寒がりの人なのかな？

特に気にすることも無く、そのまま脇を通りすぎたその時。
ドンッ

体に軽い衝撃が走った。わき腹が熱い。何が起こったのか理解できず視線を向ける。

近くにさっきのコートの男が立っている。そのまま視線をわき腹に

動かしていく。

それを目にし理解したとたん、激痛が体を襲った。

そのまま地面に倒れる。頭を強打したような気がするが、わき腹の痛みで塗りつぶされる。

「ぐ・・・うつ!？」

・・・刺されたツ!？

私のわき腹に刺さっていたのは百均などで売っていきそうな普通の包丁だった。

・・・いたいいたいいたいなんだいたいいたい!!!

痛みで真っ赤に染まる視界のなか、傍らで私を見下ろしているコートの男を見つめる。

その口は、気持ち悪いぐらい綺麗な三日月の形に笑んでいた。

そのまま、私の意識は闇に落ちた。

グルルルル・・・

キキキキッ

クツクツクツ・・・

・・・うるさい。なんなんだ、もうちょっと寝かせて。

遠くから大勢の動物の鳴き声が聞こえる。

・・・お父さんテレビの音量はあんまり上げないでっていつも言っ

てるのに。

ギャーッギャッギャッギャッ!!

一際大きな鳥の鳴き声が響いた。

- - -うるさい

起きようとして、違和感に気づく。

- - -どこどこ？

そこは丸い玉の中のようなだった。というか実際玉の中だった。
凄く大きな真つ白な玉。私はその大きな玉の中でふわふわと浮かんでいた。

- - -なにこれ？宇宙？だとしたらお月様かなー

ぼんやりとした頭で意味のわからないことを考える。

玉の向こうから透けてくる光のお陰で玉のなかにはぼんやりと明るい。
先ほどから聴こえている騒がしい動物たちの声も向こう側から響いているようだ。

特に何も考えずに玉に触れた。暖かくも冷たくもなく、硬くも柔らかくもない不思議な感触だ。

そのまま軽く押すと罅が入った。手を離しても罅はどんどんと広がっていく。

罅の間から強い光が差ししてくる。そのまぶしさに目を細めた時、玉が勢いよく砕け散った。

「グアッ」

地面に落ちた私はみつともなく声を上げてしまった。

ぼんやりとしていた意識が急速に加速していく。むせ返るような木の香り、獣の匂い。

視界が色づいていく。地面の色、空の色が目には痛いぐらいに鮮やかに映った。

『メザメタ』

『ヤツタ』

『コレデ マタ アタラシイ カミガ ウマレタ』

断片的な言葉の羅列が耳に飛び込んできた。周りに目をやると数え切れないほどの多くの動物たちが私を取り囲んでいた。その目は全て私に向いている。

生まれてこの方感じたことの無い圧倒的な圧力に体が動かなくなる。

『デハ カミヨ ワレラハ カエル』

『サラバ』

そういうと動物たちは思い思いの方向へ去っていった。

動物たちが完全に居なくなり、辺りには風が木々を揺らす音だけが響くようになった。

そこに至ってようやく脳が思考を始める。

・・・なんなのこれ！？なんなの「グルルルウアツ！？」

混乱に任せて叫ぼうとしたその時、私の喉から響いたのは悲鳴では

その二 現状把握が大事です

え？何？私、虎？

私はしばらく呆然としていた。

――え？なにこれ？どうなってるの？

とりあえず記憶を掘り返してみる。

――えー確か、雑誌の新刊がでるんで、本屋に寄ったんだ。

それで、しばらく立ち読みをして、外が暗くなってきたので帰る事にした。

途中でクラスメイトの美紀とあってちょっと話して、それから近所の佐藤さんちの柴犬のマサオを撫でて、寒いなーとかいいつつ帰り道を急いで、それで。

――角を曲がったら。

「――！」

そこで思い出した。

――私、刺されたんだ！

体がガタガタと震え始める。

熱いわき腹、傾いていく視界、そして、男の笑み。全てが鮮明に浮かび上がる。

どうしてそんなことになったのか全く分からない。でもはっきり分かるのはあれは夢ではないということ。あんなに鮮明な夢があるわけがない。

そして最初の疑問に戻る。

- - - ここ、どこ？どうなってるの？

一体どうなっているのか。病院で目覚めたというなら納得できる。でもここはどうみても病院ではないし、一体どんな治療を施したら体が虎になるというのか。

- - - 誰か、誰か説明してよ！

そう思っても周りには誰もいない。何度湖を覗いてもそこにあるのは白銀の毛並み。

辺りに人の気配はなく、ただ森が広がっているだけだ。

視界が歪んでいく。気づいたらポロポロと涙がこぼれていた。

17にもなってみつともない。そう思うが、この異常な状況と、周りに誰も居ないということが重なり無理に止める気も起きない。そのまま、私はずっと静かに泣き続けた。

チュンチュンチュン・・・

鳥の声で目が覚めた。どうやらいつのまにか眠っていたらしい。起きあがり、現状を思い出す。どうやら本当に夢ではないらしい。また涙が溢れそうになるが、今度は必死に止める。

- - - 泣いてばっかでどうすんだ！

心はまだ荒れ狂っているが、深呼吸をして落ち着ける。

表面上だけでも平静を保ってないとおかしくなってしまうそうだからだ。そしてこれからどうしたものかと考える。

とりあえずもう一度自分の体を見直してみる。

体全体を覆っている白銀の毛並みが、朝日を反射してキラキラと輝いている。体には虎特有のあの模様がついていて、尾は主観的だからいまいちよく分らないが、普通の虎より少し長めな気がする。瞳は薄い水色だ。

全体的にとっても神々しいかんじだ。動物園とかにいたらすごい人気者とかになりそう。

尻尾を意味もなく振ってみる。なんだか新鮮な感覚に少しだけ気分が上昇する。

尻尾を追いかけてくると回り、それから全力で走ってみたりする。周りの木が流れていくのが速い。

そのまま私は何も考えず走りづつけた。

そうして体の調子を確認め、元いた湖に戻ってくると、唐突にお腹がなった。

きゅっくゅっくゅ。

随分とかわいらしいその音に、逆に恥ずかしくなる。もっと豪快になってくればそこまで恥ずかしくなかったのだが。

・・・どうしよう。

前はお腹がすいたらコンビニにいけば解決した。だが、今は無一文だし第一こんな森にコンビニがあるはずもない。

サバイバル経験らしきものといえば小学生のときキャンプにいったくらいだ。それも殆どが既に調理済みのものだった。

・・・まさか、狩れと？

兎を追いかけている自分を想像してみる。さっき動き回った感じだと、多分、捕まえること自体は難なくできる。だが、問題はその後

だ。くりくりした目の可愛いウサギちゃん。その腹に牙を立て
食いちぎり――！

――できるわけがないいいいい！！！！

だとしたら残りは魚か植物だ。でも魚もなんだか罪悪感がふつふつ
と沸いてくる。見たところ周りに果物になっている木はちらほらと
ある。しかしそれが食べられるものなのか判断できない。

――え。ホントにどうしよう。

最初の段階で躓いてしまった。しかし空腹感はどんどん強くなって
いく。

魚か、果物か。その二択。

結局私は近くの木から、林檎のようなものを爪を引っ掛けてむしり
とった。

地面にぽとりと落ちたそれをおそろおそろ口に含んで咀嚼する。甘
くておいしい。林檎より少し酸味が強いがそれが甘みを引き立てて
いる感じだ。ただ口のふちから果汁が溢れてべとべとする。何個か
食べて空腹感が収まると、べろりと舌をまわして果汁を舐めとった。
そのまま毛繕いに移る。

ある程度終わったときに自然に毛繕いが出来たことにすこし驚いた。

――獣の本能ってヤツかな？

なんとか食料は確保できそうだ。水もある。少しだが獣の本能もあ
るらしい。

とりあえずは何とか生きていけそうな予感に、私はほっと胸を撫で
下ろした。

その三 他の動物と触れ合ってみましょう

なんだかよく分からない白い玉のなかから生まれて(?) 早一週間がたった。

朝起きると、林檎の木に刻んだ正の字に一本付け足す。これを毎朝行っている。それでたった日数を確認しているのだ。

それから、前足を伸ばして林檎を採る。後から気がついたのだが、私は結構でかい。多分二mぐらいはある。木になっている林檎を簡単に採れた時点で気づくべきだったのだが、他の動物にあうまで全く気がつかなかった。

そう、私は他の動物に会った。最初の二日間ぐらいは全く出会わなかったのだが、三日目に意を決して行動範囲を広げてみたらあつさり会った。

最初に会ったのは鹿さんだった。こちらに気づくなり脱兎のごとく逃げ出した。慌てて追いかけて、爪を立てないように気をつけて捕まえてみたのだが、半狂乱になっていて殆ど会話ができなかった。尋常でないその怯え方に私も怯えて逃がしてしまった。

次に会ったのは駆け出したその鹿さんを見事に仕留めた狼さんの一家。なぜか角が生えていたがたぶん狼だ。

角。そう角が生えていた。そんなものが生えている狼を私は知らない。初めてみたその動物は、私がずっと考えていた可能性を色濃い物にした。

――ここ、私がいた世界じゃない。

私がいた世界には、二m近い白銀の虎も、角が生えた狼も、時折遠くの空で見かける五、六mはありそうな巨大な鷹もいなかった。

目の前のグロテスクな光景も合わかり私が落ち込んでいると、一際

大きな角をもった狼さんが私の方に鹿さんを引きずってきた。

どうやら私に獲物を譲ってくれるらしい。もちろん私は血まみれの鹿さんに食欲が沸いたりしません。断るとなんだか驚かれた。でも、狼さんも鹿さんも皆力タコトでしか話さないのて意味が分かりにくい。

そういえば最初にあつた大勢の動物たちも皆力タコトだった。どうやら知能がそんなに高くないらしい。

その日はそこまでにして狼さん一家と別れ、湖の近くに戻った。そこでもう一つ発見。どうやらこの湖の近くには動物が寄ってこないらしい。

――多分私がいるからだろうな

大切な水の供給源を奪ってしまったようでなんだか気が引けるが、近くに川も流れていたのてまあ大丈夫だろう。

林檎をもつしゃもつしゃと食べ終わった私は、毛繕いに移った。

もうすっかり習慣化して、やらないと落ち着かないといった領域にまで達している。

今日はどこに行ってみようか。そんな事を考えながらゆっくりと毛繕いしていると、わたしのタイガーイヤーが草木が擦れる音を拾った。

カサリ。

どう聞いても風の音ではない。何か草を踏みしめる音だった。

この一週間で初めての経験に驚いた。

――湖の周りには動物たちは近寄らないのに！

慌てて立ち上がる。逃げるべきかどうか迷ったが、獣の匂いがしないことに気がついた。

- - - 獣じゃ、ない？

獣じゃない、生き物。とつさに頭に浮かんだのは。

- - - 人間！！

だんだんと近づいてくる足音のするほうに駆け出しそうになるが、すんでのところで踏みとどまった。

- - - 行つてどうする？

私はいまどうみたって肉食獣だ。確実に怯えられるに決まってる。怯えられたら、拒否されたら。

その考えが私の足を地に縫い付ける。
逃げることも近づくこともできず固まっていると、ついに音の主が草藪から姿を現した。

それは、やはり人間、だった。

その三 他の動物と触れ合ってみましょう（後書き）

一話が少し短いですがね・・・？
次回からは少し長めにします。

その四 人間の姿になりました

茂みからでてきた人間。

その人間は、いろいろ普通じゃなかった。

淡い緑色の頭髮に、落ち着いた茶色の瞳。長めの髪は首の横で一つに縛って前に流している。

目尻や頬にある皺から40代前半ぐらいにみえ、魔法使いのようなローブを羽織っていた。

そこまではまだいい。いろいろと以前の日常とは異なっているがまだなんとか理解できる。

だが、彼の周りにあるものが謎だった。

――水晶？

大小様々な水晶の玉が、十個ほど彼の周りをふわふわと浮かんでいたのだ。

紐などみえないし、紐で吊るしているような動きでもない。

明らかに重力に反しているその動きに、しばし視線が釘付けになる。たつぷり十秒ぐらいみていただろうか。動かない私に男のほうから話しかけてきた。

「あの……」

私を恐れているような感じはまるでしない、その間のぬけた調子にこちらまで脱力しそうになる。

――攻撃とかはしてこなさそうだし、拒絶とかもしなさそう。

そう判断した私は警戒を解くことにした。なんせ第一村人ならぬ第一人間だ。妙に警戒して逆に向こうにも警戒されたりいろいろと面倒なことになりそうだ。

私が警戒を解いたのが分かったのか、向こうが話を続ける。

「どうも始めまして。私の名前はベルンハルト・アーベラインといいます。ベルンと呼んで下さい。」

丁寧な物腰に、此方まで畏まってしまいそうになる。虎が畏まったところで向こうには欠片も伝わらないだろうが。

――ずいぶんとふわふわした人だな――

それがベルンの第一印象だった。のんびりとした口調に、緑色の髪が合わさってまるで、柳の木のようなゆらゆら、ふわふわといった印象をあたえる。

周囲には早くも日の当たっている縁側のような雰囲気が始めている。

こちらにも名乗ろうとして、ふと気がついた。

――私の言葉、伝わるのかな？

『私の言葉、分かりますか？』

「?・・・すみません、なにを仰りたいのかまったく・・・。」

やはりガウガウとしか聴こえていないらしい。どうしたものかと困っていると、向こうから意外な言葉が飛び出した。

「ですから、人型になっていたいただけると有り難いのですが・・・」

・・・ひとがた？

意味が分からず私がぼーんとしていると、向こうも混乱しているのか首をかしげた。水晶もそれに合わせすこし傾く。

「あなた、神獣ですよね？」

・・・しんじゅう？

次々とでてくる言葉に混乱は深まっていく。

・・・心中？臣従？なんのこと？

とりあえず分解して変換してみる。

・・・私をさしてるなら多分ジユウって獣だよね？じゃあシンって、心？新？真？

そこまでいつてひらめいた。

・・・神！！そうだ、最初、動物たちもカミガウマレタとかいった！じゃあ神獣ってことか！

「えーと。私の言葉がわかりますか？」

とりあえず変換が完了したので慌ててうなづく。

「神獣ならば人型になれるはずなのですが・・・イアンに来て貰え

ばよかったですかね？」

知らない人の名前がでたが、私はいまそれどころではなかった。

――人型になれる！？それって人の姿になれるってことだよな？

願っても見ない展開に喜びが抑えきれない。早速念じてみる。

――人人人人。

・・・何も起こらない。恨めしげな目でベルンを見つめると、彼は私が人型になるうとしている事に気づいているのか居ないのか、アドバイスのような物をしてくれた。

「別の型になるときは、具体的にどうなりたいのかイメージしないといけないらしいですよー」

具体的。なるほど。

私は早速イメージし始める。

イメージするのはもちろん十七年間親しんだあの体だ。

肩の辺りで切りそろえた黒くて、少しウェーブがかかった髪。先祖に外人がいたかなんかで少し青みがかかった灰色の目。陸上部で鍛えた体。少し胸は大きめに補正してイメージしてみる。

すると体がぼんやりと光りはじめた。

そのまま足のつま先まで必死に思い出してイメージし続ける。

光が収まった。ゆっくりと目を開ける。視線が低くなっている。ベルンより少し低いぐらいだ。

――成功した！？

喜びのまま体を見下ろして、重大な事実に気づいた。

「きゃあああああ！？」

私は悲鳴を上げてしゃがみ込んだ。

慣れ親しんだ体にはなっていた。残念なことに少し小さめだった胸もそのままだ。

しかし問題はそこではない。私が、なにも身につけて居なかったということだ。

……しまったあああああ！！体をイメージするのに必死で服イメージするの忘れてた！！

「あらら。服をイメージし忘れちゃったんですね。」

そういいながらベルンがそつと外套をかけてくれた。紳士だ。

私は必死に前をあわせて少しでも隠そうとする。

「すつすいません！いまからイメージするのでちょっと後ろ向いてもらえますか！？」

「了解です。」

ベルンが素直に後ろをむいた。その無防備な姿にふと疑問がわく。

……ものすごい今更だけどこの人私に襲われるとか考えてないのかな

ふわふわと浮かぶ水晶が目に入る。

- - - もしかしたらこれが彼を護るのかな？

謎の浮かぶ球体の意味を考える。

「できましたか？」

ベルンの言葉でハッと我に返る。

「すみません！もうすこしまっててください！」

慌てて立ち上がり、膝についた草をはらいイメージを始める。

- - - 急げ急げなんでもいいから服服服――！

さつきよりは淡い光りが私をつつむ。

光りが晴れた時、私を包んでいたのは、
ジャージとスニーカーだった。

- - - . . . えー？いや、なんでもいいとは思ってたけれども、
とっさにイメージできた服がこれってどうよ？自分。

確かに動き易い。山や森を歩くには最適な格好だ。だがしかし。

- - - もうちよっと可愛くてもよかったな。

余りにも悲しすぎる。ものすごくファンタジーな格好なベルンと
ジャージ姿の私。なんだかシュールだ。

「できたようですね。」

いつのまにかベルンがこっちを向いていた。

「……出来てなかったらどうするつもりだったんだろう。」

「余り見たことのない格好ですね。しかし動き易そうです。」

そのほんわりとした笑顔に、別の格好にさせて貰いたいなどなんだから言い出せず、私はしぶしぶ頷いた。

「これでようやく会話ができますね。」

「……会話。そうだ。」

最初の目的を思い出す。人型になれたことと服がジャージになってしまったことで吹っ飛んでしまっていた。この人はなんだかいろいろ知って居そうだ。なんでこんなことになったのか教えてもらえるかもしれない。

「お名前を教えてくださいませんか？」

「あ、私の名前は……」

「……あれ？」

・・・私の名前。名前。あれ？

名前が思い出せない。そんなはずは無いと必死に記憶を探る。

・・・だめだ。なんで！？

家族の名前。友達の名前。何時何処で誰と何をしたか。それらは思い出せるのに、自分の名前だけが欠けている。苗字さえも思い出すことが出来ない。

・・・なっなんで！？

友達からの年賀状。お母さんからの呼び声。自分の名前に関係ありそうな記憶を掘り起こすがそこだけが欠けている。ショックで再び地面にへたり込む。

「どうしました？」

「名前が・・・分からないんです。あつたんです。名前が。でもそれが・・・思い出せないんです。」

「・・・そうですか。」

呆然とする私に不思議そうにベルンが問いかける。

私が掠れた声で答えるとベルンも悲しそうな表情になった。少し考えこみ、ベルンは一つの提案をした。

「なら、新しい名前をつけてみては？」

「・・・え？」

「自分で、自分の名前を決めるのです。」

――自分で？

十七年間慣れ親しんだ名前を捨てて、自分で名前をつける。

その行為はなんだかとても嫌なものに思えた。自分から元の世界との関わりを断ち切ってしまうようで。

でも、どうしても自分の名前が思い出せないし、名前がないと多分いろいろと不便だ。

――思い出すまでの仮の、仮の名前。それなら大丈夫かな。

仮の名前なら、つけても関わりは切れることはないだろう。あだ名のようなものだと思えば良いのだ。

そうになると、名前はどうするべきだろうか。

あまり日本的なものだとかここだと浮いてしまうだろう。ベルンの名前を聞く限り外国風の名前のほうがよさそうだ。

――外国――外国風の……

「！」

思いついたものがあつた。

「ティアナ……」

小さいころ飼っていた猫の名前。橋の下でダンボールに入れられて捨てられていたのを拾ってきたのだ。

親には反対されたが必死に説得して飼うことを許可してもらった。可愛い名前をつけてあげようと、丸々一日を費やして考えた。真っ

黒な毛並みをしていて、イタズラ好きでよく靴下を噛まれたものだ。中学に上がるときに寿命で死んでしまったが。あときはひどく泣いたのを覚えている。

・・・彼女の名前を借りよう。

それならきつと向こうと繋がっていられる。

「ティアナですか・・・よい名前です。」

優しい笑顔でそういわれて、思わず笑みがこぼれる。小さいながらに頑張ってつけた名前だ。褒められて嬉しくないわけがない。

「ようやく笑顔を見ることができました。」

「え？」

「素敵な笑顔ですね。」

そういつてにつこり微笑まれて、顔が少し熱くなった。

・・・確かに、さつきからパニック起こしたり呆然としたりろくな顔みせてなかったけども！

・・・ひとつだけ言いたい！あんたいつたい何処のホストだ！！

そんなこと口にだせるわけもなく、顔を背けるだけにした。気にせずにベルンは話を続ける。

「それで、ティアナさん。」

「あ、ティアナで結構です。」

「そうですか。ではティアナ。私が今日ここにきた用件をお話しましょう。」

言われてみれば用もなくこんな森にくるとは思えない。私を見ても驚かなかったし、最初から私に話があったのだろうと判断する。そして、ベルンの口からでてきた『用件』に私は耳を疑うことになる。

「私の助手になってくれませんか？」

その四 人間の姿になりましょう（後書き）

このような長さでどうでしょうか・・・。

とりあえずこれを目安に書いていこうかと思っています。

その五 相互理解を深めましょう

「助手……ですか？」

「はい。」

言っている意味が良く分からず聞き返した。

助手とはあの助手だろうか。探偵の隣にだいたい一人はいて、色々な手伝いをするあれのことだろうか。

「えっ なっ……何でわたし……。」

「落ち着いてください。少々いきなり過ぎましたね。すみません。もう少し詳しくお話させて……っ」

バリント

なにかが割れる音が響いた。音が聞こえたほうに目をやると、ベルンの周りをふわふわと漂っていた水晶の内の一つが真っ二つに割れて地面に落下していた。

日光を反射してきらきらと破片が輝いていて、再び浮かび上がる気配はない。

「え、どうしたんですか？」

「……すみません。ゆっくり話している余裕は無くなったようです。」

ベルンの顔には先ほどの微笑はなく、真剣な表情で森の一点を見つめていた。

その突然の変化に思わず黙ってしまふ。
するとベルンの視線の先から何か音が聞こえてきた。

- - - 人の声？

一人や二人ではない。おそらく十数人はいる。声はほとんど此方へ近づいてきている。

ベルン一人だけでも十分珍しい客人だというのに、今日一日だけでもどれだけの人がくるのだろうか。

ぱさり。視界が急に暗くなったと思ったら、先ほどの外套を頭から掛けられていた。

「少しこれを被っててください。顔をみせないようにしてくださいね。」

理由はよくわからなかったが、大人しく従う。しばらくすると声の主たちが姿を現した。

森の奥からぞろぞろと出てきたのは、いかにもガラの悪そうな男たちが十七人。全員所々に罅の入った鎧を纏っていた。その集団の先頭にいた大柄な男がこちらに気づいた。

「あー？おめえかあ？陳腐な結界なんぞ張ってやがったのは？」

掠れた声が辺りに耳障りに響いた。周りの男たちの様子から、おそらくこの男はこの集団のリーダー的存在なのだろう。くすんだ色の薄汚れた金髪が鈍く光を反射していた。酔っているのか、顔が赤く、足元が少しおぼつかない様子だ。

「ええ。あなたが破ったのですか？」

ベルンがまったく臆することなく返事をする。それに金髪の男が自慢げに鼻を鳴らす。

「おうよ。あんな結界俺様にかかれば紙屑も同然よ。」

周りの男たちはこちらが怯えているように見えたのか、下卑た笑みを浮かべてこちらを見つめている。

その視線に穏やかでない物を感じて、自然と外套を握る手に力を込める。そして、男は半ば予想されていた言葉を口にした。

「命が惜しかったら金目のもん寄越しな。」

――強盗！

なんとなくまでもそうな感じではないと思ってはいたが、強盗に遭うという生まれて十七年目にして始めての経験に、思わず体が固まってしまう。

しかしベルンはいつのまにか先ほどの微笑を顔に浮かべていた。

「すみませんが金目の物は持ってないんですよ。それでは。」

そのまま私の手を引いてその場を後にしようとする。そこに金髪の後ろにいた男の内の一人が回りこんだ。

「それで逃げられると思ってんのか？その水晶、魔導具だろう？魔導具は高値で売れる。置いていきな。」

いつのまにか男たちに周囲を囲まれていた。男たちがニヤニヤと笑いながらそれぞれ武器を取り出し構え始めた。そんな状況にも関わ

らずベルンにはまったく焦った様子がない。

「うーむ。魔術はあんまり使いたくないんですよ。引いてくれませんか？」

「なにをふざけた事言つてやがる。」

のんびりとしたベルンの口調に男たちの内の一人が気分を害したように吐き捨てた。

「身包み剥いじまえ。」

金髪の男の号令で輪がジリジリと狭まってきた。

ベルンは仕方ないですね、と呟くと水晶の一つをおもむろに手に取った。

「おい、動くんじゃね・・・」

バチッ！！

光が走ったと思った次の瞬間。男たちの動きが止まった。そのままゆっくりと傾いていく。とさり。軽い音を立てて男たちが次々と倒れていく。顔を見ると白目をむいてびくびくと痙攣していた。

・・・えっ！？

一人だけ少し離れていた金髪の男もなにが起こったのか理解できていないようだ。辺りを見渡し仲間が全員失神していることに気づくと、動揺した様子で叫んだ。そこに先ほどの余裕の表情は欠片も残っていない。

「な・・・っ！？なにしゃがった！？」

「なにつて、初歩の雷魔術ですよ？」

「ふざけんな！！お前、詠唱なんて・・・！！」

酔いも吹き飛んだのか、ほんのりと赤かった顔がいまや青くなっている。

それに相反するベルンの微笑みがなんだか今は恐ろしくみえた。

「うっうわあああああ！」

「おやすみなさい。」

バチッ！

男はベルンに切りかかろうとしたが、結局は周りの男たちと同様に地に伏すこととなった。

今度は何が起こったのか見えた。

ベルンが触れているのとは別の、男に近かった水晶の中に複雑な幾何学模様が浮かびあがり、それから光が進り男が倒れたのだ。見え方には見えたのだがどうなっているのか全く理解できなかった。

一瞬。本当に一瞬で大勢の男たちが無力化されてしまった。

「もう大丈夫ですよ、外套をとってください。」

「あの・・・今のつて・・・」

先ほどまでなにか不思議な物としか認識していなかった水晶たちが、

今はなんだか恐ろしく感じられて、外套を返してから少し距離をとる。

「ああ。魔術をみるのは初めてですか？」

「魔術・・・」

もうなにが出てきても驚かないと思っていたが、目の前で起きるとやっぱり驚いた。

映画やゲームとは迫力が段違いだ。

「ええ。空气中に存在する魔素を体にとりこみ、魔導具を媒介しあらゆる現象を起こす術。それを私たち人間は魔術と呼んでいます。」

「・・・その、浮いてるのも魔術なんですか？」

私がずっと気になっていたことを質問するとベルンの顔がパアッと輝いた。

「ええ！私は水晶との魔素共有率が高いので水晶の魔導具を使用しているのですが一つの魔導具で同時に複数の魔術を発動することはできないので常に複数持ち歩くことにしているのですしかし水晶球はかさばるので水晶の一つを用いて他の球を浮かべる簡易的な術を発動し持ち運び更に全ての水晶に私特製の陣を刻むことにとつて触れずとも魔素を供給し魔術を発動させることを可能とし」

「ちよつちよつと待ってください！」

「・・・急に超饒舌になったよこの人！？」

「えっまだお話したいことが・・・」

「また後日！あとでゆっくりと聞きますから！」

「・・・了解しました。」

どこか残念そうにするベルン。だがあのまま放って置いたら間違いなく日が暮れるまで終わらなかった。

とりあえず話を中断させることに成功してほっと息をつく。

どうやらベルンは生粋の魔術好きのようだ。目の輝きが半端ではなかった。

「それで、この人たちは・・・」

「ああ、山賊でしょう。しかし、なぜこんな森へやって来たのか・・・？根城がこの辺りにでもあるのでしょうか・・・？」

「それは、ないと思います。一週間くらいここで暮らしていましたけど人の気配も匂いもなにも感じませんでしたし。」

住処があるなら何かしらの匂いや形跡が残っていてもおかしくないが、それは全くなかったし、動物たちも人間を警戒しているような様子はなかった。ということはここに人間は滅多に来ないということなのだろう。

「そうですか・・・まあそれは後で聞けばいいとして。ティアナさん。」

「・・・あつ、はい。」

――しまった。そうだティアナティアナ。慣れないと。

ティアナという名前に慣れていないために返事が遅れてしまった。特に気にした様子もなくベルンは続ける。

「無粋な客人に邪魔されてしまいました。先ほどのお話をしましょうか。」

「はい。」

男たちが死屍累々と倒れているというのに傍で平然と会話を続けてもいいものか迷ったが、倒した本人が平然としているので気にしないことにする。

「神獣である貴方にいきなり助手だなんて不躰すぎると思います。が・・・」

「あの、すいません。」

申し訳ないとは思ったが話を遮る。ベルンは特に気分を害した様子もなくこちらへ視線を向ける。

「はい、なんでしょう?」

「あの、多分私のことだと思っんですが、神獣ってなんなんですか?」

最初から疑問だった。ベルンは最初から私のことを神獣と呼んでいた。私は一体何なのか。その答えをベルンは持っているのだろうか。

「……だつたら、教えて欲しい。」

なぜ私は虎なのか。なぜこんな世界に。問いただしたい衝動をこらえる。

「……そうですね。まずそこからお話したほうが良いかもしれませんね。ですが、もう少し待っていただけますか？もう少しでやってくると思いますので……。」

「やってくる？」

「ええ。……噂をすれば。」

突然辺りが真つ暗になった。驚き上を見上げた私は、更に驚くことになった。

「……でっでかあああああ！！？？」

其処には巨大な鷹が日の光を遮っていた。羽音も何も聞こえない突然の出現に硬直する。鷹が空中で羽ばたき私たちの上で静止する。そこでようやく羽音が聞こえた。バツサバツサと音を立てながら鷹が私たちを見つめている。

漆黒の翼が光を反射してキラキラと輝いていた。私は湖面に写った自分の姿をみて神々しいと思ったが、どこか似通った雰囲気はこの漆黒の鷹も纏っていた。

私たちを見つめるその瞳は羽よりも薄い灰色をしており、深い知性を感じさせた。大きさは虎状態の私よりおそらくふた周りほど大きい。

「なっ なっ ……！」

私が口をパクパクさせていると、鷹が突然淡い光に包まれた。
ストン。

次の瞬間、鷹の代わりに地面に着地したのは、銀色の髪をもつ青年だった。

鋼のような硬質な輝きを持つ銀色の髪。鋭さをもつ瞳は深い藍色だった。

年は20前後といった所だろうか。ベルンと同じ服装をしていて、身長はベルンより少し高い。

「おい、ベルン。貴様どういっつもりだ。」

私のことを完全に無視し、青年がベルンに詰めよる。その表情は陰しく先ほどの強盗などはその瞳を見ただけで逃げ出しそうだ。

その視線を真っ向から受けているというのにベルンの微笑は欠片も揺らぐ様子はなかった。

「どういっつもり、とは？」

「勝手に屋敷を抜け出して、『ちょっと出かけてきます。探さないで下さい』なんて置手紙を残しておいて、一体どういっつもりだと聞いているんだ！」

「いや、それは・・・」

「あっあの・・・」

「お前はいつもいつも！人間という生物は脆弱なくせになぜ無茶ばかり！」

「あつあの！！すみません！！」

「あ？」

完全に置いてけぼりになっていた。意を決して叫びかけると今私に気づいたと言わんばかりに此方を向いた。鋭い瞳に視線を逸らしそうになるが堪える。黙ったまま見つめていると、青年が口を開いた。

「お、おいベルン、こいつ、まさか・・・」

青年の顔が心なしか引きつっている。

「あ、紹介します。こちらは神獣のティアナさんです。」

ベルンが私の肩を抱きながら青年に紹介する。そして次は青年を指し示し、

「ティアナさん。こちらは私の友人兼助手のイアン。気づいているかと思いますが神獣です。」

につこり。そんな音が聞こえてきそうな満面の笑みを浮かべていた。

「「なあああああああ！?!?!?」」

その五 相互理解を深めましょう（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません。

しばらく不定期更新が続くかもしれません。

その六 仲間を作りましょう

サワサワ・・・

風が木の枝を撫でる音だけがあたりに響いている。
私とイアンはお互いを凝視して固まっていた。

・・・え、え、え！？神獣って私以外にもいたの！？

予想外の事態に思考が追いつかない。先に回復したのはイアンだった。ベルンの前に素早く移動し私から庇うように立つ。その目は鋭く私を見つめていた。

「こいつに近づくな。」

突然の宣言に混乱が深まる。そこまで警戒されることをした覚えなどない。

「大丈夫です。ティアナさんは人を襲うようなことはありませんよ。ですよね？」

ベルンがイアンの背後から声を掛ける。イアンの方が背が高いので姿が殆どみえない。

「っはい！もちろん！」

・・・心外な！襲ったりしませんよ！？

だがイアンの警戒は全く緩まなかった。ふう、と息をつく小さく頭を振る。

「こいつにその気が無くても関係ない。・・・おい、その木を蹴ってみろ。」

「え、なんで・・・」

「軽くでいいから。」

よくわからない展開に少し戸惑ったが、特に逆らう理由もないので従う。
近くにあった適当な木に近づき、軽く揺らすぐらいのつもりで蹴る。すると。

バキッ

「な・・・っ」

なんと足が木にめり込んだ。そのまま木は反対側へゆっくりと傾いていく。ついには大きな音を立てて完全に倒れてしまった。
予想だにしない展開に啞然として尻餅を着いてしまう。

「・・・やっぱりな。生まれて一週間かそこらで力が加減できてるはずが無いんだ。こんなひょろい魔術バカなんて簡単にへし折られちまうぞ。」

「あらららら。これはこれは。」

ベルンも驚いた様子で無残にへし折られてしまった木を見つめている。

「分かったか。分かったら下がってろ。」

イアンがベルンの腕を引く。しかしベルンはそれを振り払った。

「ちょっと待って下さいイアン。そういう訳にもいきませんよ。少し落ち着いて下さい、大丈夫ですから。」

そついうとイアンの背後から抜け出し、いまだ尻餅をついたままの私のほうへ近づいてきた。

先ほど私の力をみたばかりだというのに、自然な動作でしゃがんで私と目線を合わせると、私を落ち着かせるようにゆっくりとした口調で語りだした。

「ティアナさん。あなたは、神獣について知りたいと仰いましたね？」

「・・・はい。」

「実は、私たちもそうなのです。」

「え？」

意外な発言にベルンを見つめる。その背後ではイアンが小さく舌打ちをして私たちを見つめていた。

イアンが止めにこないことを確認し、ベルンが静かに語り始めた。

「神獣というものは本当に謎に包まれた生き物なのですよ。」

私は普通の人間なのですが、縁あってイアンと友人になることができました。そしてイアンと語り合い、遠く彼方の存在だった神獣が近くに感じられるにつれて、私もイアンも疑問に思うようになった

のです。この世界に住むどんな生物とも一線を画する神獣とは一体なんなのだろうと。」

ベルンの澄んだ声が静かに、しかし力強く私の中に浸透していく。どこか太古の神話でも語るかのようなその口調に、私はすっかり引き込まれていた。

「しかし、元々人とは余り関わらない生き物です。存在が確定しているのはイアンしかおらず、他は地域の伝承などに登場するのみで、現状できることはそれを少しずつ集めることだけでした。」

ベルンの目がまっすぐに私を見つめる。その強さに少したじろぐ。

「そこに、現れたのが貴方なのです。・・・貴方も、私達と一緒に探し求めてくれませんか？ 貴方達神獣について。人間の傍に居るということは色々不自由があるかもしれませんが、恐らく、イアンと共にあれば新しい発見もありましょう。私も精一杯協力させていただきます。」

ベルンは静かに私を見つめている。私の返事を待っているのだ。それを理解すると、私はゆっくりと口を開いた。

「・・・私。知りたいです。自分について。なぜ、此処にいるのか。」

「はい。」

「今まで何をしたらいいのかわからなくて、とりあえず生きていました。でも。このまま此処にいても、きっと何も分からないと思うんです。」

「・・・・・・では。」

「はい。・・私を、仲間に入れてもらえますか？・・私みたいなのが役に立つかわかりませんが。」

「おい待て。勝手に話を纏めに入るなよ。」

穏やかな空気を切り裂く鋭い声が上がった。

その声にイアンの存在を思い出す。完全に意識の外に放り出していた。

慌ててベルンの向こう側に視線を向けるとイアンが腕を組んでこちらを睨んでいた。

「えっあつごめんなさい。」

慌てて立ち上がりイアンに軽く頭を下げる。

「お前が謝らなくて良い。俺が怒っているのはこいつに對してだ。」

イアンがベルンのほうを顎でしめす。

「俺に無断で勝手に神獣に会いに行くとは何事だ。」

「いや、だって、イアンがはっきりしないものですから・・・」

ベルンがモゴモゴと口ごもる。その様子はお母さんに0点のテスト

を見つけた子供のような。40ぐらいの外見だというのに不思議と違和感が無い。

しかし話の内容に疑問を持つ。イアンがはっきりしないから会いに来たとはどういうことだろうか。それにそういえばベルンはどうやって私のことを知ったのだろうか。先ほどの言い様からここに来る前に私のことを知っていたようだ。

「どういことですか？」

「ティアナさんを発見したのはイアンなんですよ。」

「・・・十日ほどまえ、この森の上空を通った時に繭を見つけたんだ。」

「繭？」

聞きなれない単語に首をかしげる。一体なんの関係があるのだろうか。

「お前が入っていたあれだ。アレを俺は繭と呼んでいる。」

その言葉に一週間前に記憶をさかのぼる。そういえば、私が入っていたあの白くて巨大な玉。

内側からじゃよくわからなかったが、白いし外からみたら繭にも見えるかもしれない。

「それをベルンに報告したんだ。そしたら次の日ベルンがいなくなった。まさかと思って此方へ向かっている途中に、ベルンが魔術を使用したのが分かって、急いで駆けつけたんだ。」

「いや、早速接触してみましょって言う私に、イアンが煮え切らない返事ばかりするので・・・」

「駆けつけてみたら山賊らしき男達が倒れているし。山賊の被害者か何かと思った男は神獣だというし。ベルンは何の警戒もせずになにの傍にいます。心臓が止まるかと思っただぞ。」

「・・・え？」

何だか可笑しなことを言われた気がする。ベルンも疑問に思ったのか、首をひねっている。

「イアン？もう一度言ってもらえますか？」

「あ？心臓が止まるかと・・・」

「いえ其処ではなく。私の聞き間違いですかね？先ほど、ティアナさんのことを何と仰いました？」

「・・・男？」

ぽつりと呟かれた単語にベルンが慌ててイアンに駆け寄り肩を掴む。

「・・・な、な・・・っ!!」

「何を言っているんですかあなたは！謝ってください！早く！」

「あ？何？」

イアンが混乱した声をあげる。何を間違えたのか今だ全く分かっていないその表情に、頭の中で何かが切れる音がした。私の方を見たベルンがさつとイアンから離れる。

「だ〜れ〜が〜！」

先ほど私がへし折った木を掴む。思ったよりも簡単に持ち上がった。私はそれを両手で抱え上げる。そして少し離れたところに立っていたイアンに向かって、

全力でぶん投げた。

予想はしていたが、イアンは慌てながらもあっさりそれを避けた。ベルンはもう既に結構な距離をとって安全圏にいる。

「いついきなり何しやがる!？」

「誰が・・・っ誰が男よ!？」

イアンが驚いた表情で私を見る。

「えっ・・・まっまさか女あ!？」

「もしかしくなくても女でしょうが!―一体私の何処見たら男にみえんのよ!―」

その言葉に恐らく無意識にだろう、イアンの視線が私の頭より若干下のほうに向く。

何処を見ているのか、何を思ったのか正確に理解した私は一気に頭

に血が上るのを感じた。

……こいつつ……!!

私は胸を隠すように両腕を交差させる。

「確かに！ひよっ標準より小さいけど……でもっ！ちゃんとあるわよっ……!!」

「俺は何も言っていないぞ!？」

「視線が雄弁に語ってんのよ!」

そのまま思いつきり睨みつける。すると相手も開き直り始めた。

「大体！紛らわしい格好してるほうも悪いだろうが!？髪だって短いし、ズボン履いてるし！女ってのはもっと髪を伸ばしてスカート履いてるもんじゃないのか!？」

「知らないわよそんな常識!!開き直ってんじゃないわよ!」

そのまま睨みあう。一気に険悪な空気になった湖畔。その空気を引き裂いて、

雷が二人の間に落ちた。

凄まじい音と光に顔を覆う。しばらくして目を開けると、小さなクレーターが二人の間に出来ていた。パラパラと砂埃が辺りに舞っている。

「・・・落ち着いてください。ね？」

声のしたほうに目をやると、そこにはにっこりと微笑みながら水晶を掴んでいるベルンがいた。
ぱっと見は仏像のような自愛に満ちた笑顔に見えるが、よくみると目が全く笑っていない。

「・・・すいません。」

そして二人でベルンに思い切り頭を下げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8155x/>

私の異世界転生録

2011年11月14日01時06分発行